

HOF 01-018

本田財団レポート No.18

「日本に対する肯定と否定」

東京大学教授 辻村 明

## 講師略歴

辻村 明（つじむら あきら）

大正15年 浜松に生まれる。

昭和26年 東京大学文学部社会学科を卒業。

昭和47年 東京大学文学部教授 現在に至る。

専攻 社会心理学、社会学

著書 「大衆社会と社会主義社会」（東大出版会）

「日本文化とコミュニケーション」（日本放送出版協会）

「イデオロギーを超えて」（潮出版社）

「新聞よ驕るなかれ」（高木書房）

「私はノイローゼに勝った」（ごま書房）

はじめ多くの著書がある。

このレポートは昭和55年5月20日、パレスホテル  
において行なわれた第13回本田財団懇談会の講演の  
要旨をまとめたものです。

## はじめに

今年には戦後35年になるわけですが、ちょうど戦後30年という時期に、私は戦後の大衆心理というものをひとつまとめてみようと考えました。ところがこの2～3年、東大の文学部が紛争にまき込まれてそれが延び延びになっております。たまたま今年が戦後35年という区切りのいい年ですので、なんとか今年中にはそれをまとめたいと思っております。



## 戦後の大衆心理の変遷

本日はその仕事の一端をご紹介しますわけですが、戦後の大衆心理、あるいは世論と言っても良いかと思いますが、その移り変わりを検討していく場合に私は3つのものからみ合いを考えています。

1つは新聞です。新聞は世論を反映するという事から、どうしても欠かせないファクターです。それから世論をとらえようとする場合、世論調査というテクニックを使うのが普通です。ひところは新聞が世論を代弁する、世論を指導すると言われてきました。まあ今でも新聞記者は、自分は世論を指導しているんだという自負をもっているだろうと思いますが、いろいろと世論調査の結果をつき合わせてみますと、必ずしも新聞が世論を反映してはいないという点がたくさん目につきます。

そこで世論を反映しているのは、新聞よりもむしろベストセラーの本ではないかと考えました。新聞ですとこれは月極めで購読するわけで、多少批判があっても毎日配達されてきてしまいますから、A新聞からB新聞へと切り換えるという事はなかなかできにくい状態にあります。それに対してベストセラーの本ですと、もちろんベストセラーにするために、たとえばカップボックスなどというものはいろいろと画策しますし、また最近ではテレビとタイアップしてベストセラーにのせるなど、いろいろと裏工作があるようですが、しかしなおかつ本というものは1000円内外の金を払って一つ一つ選択して買うものであって、何10万部、何100万部と売れる本というのは、世論というものをより忠実に反映しているのではないかと考えます。

そこで新聞の論調と、世論調査の結果と、ベストセラーの動向という3つをからみ合わせて、戦後の大衆心理の変遷を分析してゆきたいと考えている次第です。

### ●政府・新聞・民衆(世論) — 4つのパターンと8つのケース —

まず最初に、政治的な舞台における主要なアクター(俳優)として、政府と新聞と民衆(世論)という三者の関係を考えてみたいと思います。

パターン	ケース	政府	新聞	世論
A	(1)	+	+	+
	(2)	+	+	-
	(3)	+	-	+
	(4)	-	+	+
B	(5)	+	-	-
	(6)	-	+	-
	(7)	-	-	+
C	(8)	-	-	-

図1

ひところは新聞は世論と同じであり、それが政府と対抗しさえすれば言論の自由はおのずから実現すると考えられていました。ところが最近、新聞が必ずしも世論と同じではないということが多くなっておりまして、政府・対・新聞・対・世論という3者のからみ合い、つまり3極構造という形で考えなければいけないと思うのです。

これを機械的に組み合わせてみますと、図1の様に8通りできます。ある政策を実現しようという立場を仮りにプラスとしますと、政府も新聞も世論も皆プラスで意見が一致しているというケースが(1)です。次の(2)(3)(4)は、2つがプラスで1つがマイナスという組み合わせになります。(5)(6)(7)は、1つがプラスで2つがマイナスという組み合わせになります。最後の(8)は、すべてがマイナスという組合せです。

そこで具体的な例として、(1)のケースは、北方領土や尖閣列島の問題など、国際的な領土問題がこれに当たります。政府と新聞と世論の3者が一致しています。特に新聞という場合、私は朝日新聞を日本の新聞の代表としてとりあげ、世論という場合、私は朝日新聞の世論調査の結果を使っています。進歩的な朝日新聞も、北方領土は日本固有の領土であるから返せといっています。また世論調査の結果も、ハボマイ、シコタンだけでなく、クナシリ、エトロフまで返せというのが多数意見になっています。また台湾、中国との間の尖閣列島の問題でも、朝日の社説は、尖閣列島が日本のものだと主張しております。

それと対をする(8)のケース、つまり3者のすべてがマイナスで一致しているというケースとして、公害や交通事故の追放といったものをあげることができます。

このあと、ケース(2)と(7)をBのパターン、ケース(3)と(6)がCのパターン、ケース(4)と(5)がDのパターンと結びつけることができますが、ケースごとに簡単に説明していききたいと思います。

(2)というのは、政府と新聞とが一致して世論だけがずれているというケースです。(3)は、政府と世論が一致していて新聞だけがずれているというケースで、これは新聞が最も嫌うケースです。それに対して、新聞が最も望むケースは(4)です。世論と新聞が一致して政府に対抗しているというのが新聞の一番望む所なのですが、戦後史をいろいろと調べてみますと、案外(4)のケースは少なくて、(3)のケースが多いように思われます。

具体的な事例で申しますと、(2)のケースとしては、日中国交回復とか沖縄返還後の基地のあり方などがあります。沖縄問題では「核抜き本土並み」とか、あるいは「核付き自由使用」とか、4つばかりの選択がありました。基地の態様という事で選びますと、政府と新聞は核抜き本土並みの線に落ちついたわけです。財団理事長の下田先生にはいわゆる下田発言というのがありまして、「沖縄が一刻も早く本土に復帰するためには、基地の在り方が現状のままでもやむを得ないと沖縄の人が考えるならば、本土はそれに反対する事はできないだろう。」というご発言をなさったのに対して、当時の朝日新聞は下田発言をケチンケチンにやっつけました。しかし朝日新聞自身の世論調査を見ますと、基地の態様だけでどれが良いかとの質問に対しては、沖縄でもやはり「核抜き本土並み」だとか「基地の全廃」などが多く支持される結果になります。ところが基地のあり方で望ましい選択をしますと、それだけ返還の時期は遅れるというマイナス面があります。そのマイナス条件を加味して質問しますと結果はガラッとかわり、沖縄の世論も「返還の時期が遅れるならばやはり現状でもやむを得ない。核付きで米軍が自由に発進してもいたしかたない。それよりも一刻も早く返してくれ。」というのが51%の過半数になりました。ですから私の本(『新聞よ誇るなかれ』高木書房)でも書きましたが、朝日新聞の世論調査によっても世論は下田発言に賛成だったんでして、政府や新聞の主張した「核ぬき本土並み」とはズレていたといっていると思います。

次に(3)の場合、サンフランシスコ平和条約や再軍備などの問題があげられます。サンフランシスコ平和条約の場合、「全面講和」か「単独講和」かの選択で、吉田首相はやれる所からやるしかないと決めて単独講和に踏み切ったわけです。しかし当時東大の南原総長は全面講和論のチャンピオンだったわけで、朝日新聞などはそれを応援し、全面講和を主張しました。その朝日新聞の世論調査を見ますと、吉田首相のサンフランシスコにおける行動を非常に支持しておりますし、アメリカの行動も支持しております。それに対してソ連の行動には非常に批判的な態度を示しております。

(4)のケースというのは、政府によほどのミスがない限り、成立しにくいと思います。田中元首相の金脈問題とかロッキード事件とか、政府に大きなミスがあった場合に、(4)のような形になるわけで、戦後の重要な事件では意外に(3)が多くて(4)が少ないように思います。

(5)のケースとしては、60年安保あたりが考えられます。岸首相が改定を強行したのに対して、新聞と世論が反対にまわったように思います。ただ60年

安保も本来はサンフランシスコ平和条約の延長ですから、(3)のケースになってもいいわけですが、政府が余りに強引であったりすると、世論も新聞の方にくっついてしまう可能性を示しています。

(6)のケースには、国鉄のストライキがあてはまると思います。政府と世論は迷惑論でストライキに反対したわけですが、朝日は75年のスト権ストの時など、組合側を非常に支持する論説を掲げました。

(7)については、本来こういうケースは無いのではないかと考えていました。と申しますのは、世論というのは民主主義社会では尊重しなければならない重要な力になっていますが、何か政策立案のイニシアティブをとっていくという力ではありません。政策のイニシアティブは政府や新聞がとっていくものであって、世論はその後からついていって、ブレーキをかける役目をするものだと思うのです。そんなわけで、世論がイニシアティブをとって何かをやろうとし、政府と新聞とがその反対にまわるというケースは無いのではないかと考えたのですが、この話をほうぼうで致しますと、いろいろご意見をいただきました。このようなケースもやはりあるように思うようになりました。たとえば乱塾時代といって、政府も新聞も反対していますが、民衆の間ではどんどん塾行きが拡まっていく。あるいはポルノの普及などもこれに当るかと思えます。

(8)は、既に説明しました。

以上、新聞と世論とがいかにくれることがあるかという事をご理解をいただきたい事と、今後いろいろな事件が起った場合に、こういった図式をあてはめてみて、どのケースに当るのかとお考えいただくのも1つの参考になるかと思ってお話ししました。

## 新聞の社説の分析

次に新聞とベストセラーの動向というものをご紹介していきたいと思えます。

私は戦後30年という段階で、朝日新聞の元日の社説と大晦日の社説を全部ある角度から分類してみました。なぜ元日と大晦日を選んだかと申しますと、やはり元日というものは1年を展望してある抱負を語るべきですし、大晦日というものは1年を回顧してしんみりと反省するときでして、日本に対する評価が出やすい時点だと思えます。それから戦後30年の社説全部を分析するわけにはいきませんから、何らかの選別をする意味で、元日と大晦日の社説を選んだわけです。

その結果、日本に対する評価という角度から分類してみますと、1つの社説でも肯定・否定あるいは価値判断なしの単なる解説というものに分れます。特に大晦日などになりますと、時には予算の説明という様な単なる解説が社説になっていることが多くあります。その結果、解説が53%の多きに達しました。これだけでも日本の新聞がいかに関心をもっていないかがよくわかる

と思います。それに対して日本否定論というもの、日本の現状とか過去とかを否定するのが46%。それに対して日本あるいは日本人を肯定するものがわずかに8.5%と実に少ないわけです。

つまり毎日毎日の新聞で日本はだめだだめだときかされるわけですね。われわれ個人の行動においても、日常他人に対する時には、「私はくだらない人間でございます。いたらない人間でございます。」と自分を否定する挨拶がちですが、腹の底まで本当に自分を否定したならば、自殺する他はないわけです。しかし現に自殺せずに生きているという事は、表面はともかく腹の底には、「オレもそのうちに見ている」という自分を肯定する意識が巣くっているのだと思います。民族の意識でも同じであろうかと思います。新聞の社説で日本はだめだだめだといわれても、根底ではやはり「日本人はもう少しいいのではないか」とか、「そんなことはないはずだ」とか、日本を肯定する意識があるのではないかと思うのです。ここに新聞（表層意識）と世論（深層意識）との根本的なズレがみられるように思います。そこで新聞の論調を少しみていきたいと思います。

ごく大ざっぱにいつてしまえば、やはり終戦直後は日本軍国主義が敗退して無条件降伏をしたわけですから、戦前の日本軍国主義あるいは日本に対する否定論というものが多くでてきたということは当然だと思います。それが60年代の高度成長期に、日本人がいろいろの業績をあげることによって自信をもつようになり、70年代には日本肯定論、つまり日本もなかなかいいんだという、日本を見直す意識が台頭してきたと思うんです。それを以下、個々の資料で跡づけてみたいと思います。

## ● 否定的な社説

たとえばまず最初に、朝日新聞の昭和21年の大晦日の社説に「除夜の鐘を聞く人に」というのがあります。私はこの見出しを見た時、敗戦直後の廃虚の時代に、なおかつ除夜の鐘がゴーンと鳴り響いていたんだなと思い、そういう日本の伝統文化に対する肯定意識が表明されているものと思って読んだわけです。しかし実は全く逆でして、非常にとんちんかんなお門違いな事をいっております。少し読んでみますと、「真実というものを、人間が自然に働きかけて生きていく無限の働き、矛盾と矛盾の中から新しいものを産み出していく働きとみるならば良いが、日本人の欠点の1つは誤って現実を固定して考えることではなからうか。もしそうだとすればそこから進歩的な立場が生まれてくるはずは無い。日本の仏教徒の中から熱烈な社会批判者の生まれない事。自然科学研究者の生まれない事。これらはいずれも仏教徒が本当の意味で大乘仏教になっていない事の証拠である。口では大乘仏教というが、少しもそれらしい活動を日本の僧侶は示していない。日本の僧侶の内からたとえば原子核理論の世界的な権威者が現われるようになった時にはそれらの僧侶が大乘的な信仰を獲得した時である。」と書いている有様で、バカも休み

休みに言えといたくなります。仏教の坊さんに原子核理論の専門家になることを期待するなどというのは、どうかしていると思いますね。この社説は要するに仏教批判であり、日本文化批判なのです。

また昭和24年に古橋選手が全米選手権でアメリカ勢を破り、意気消沈していた日本民族のために万丈の気炎をはいたという事があります。この古橋選手の偉業達成の時も、何か本当は賛辞を送りたくないのだが、賛辞を送らざるを得ないといった文章があったりしてどうも素直に喜ぶ姿勢がないんですね。マクレーンという古橋の好敵手が進学のためにアルバイトをしなくてはならなくなり、出場できなかったのだそうですが、もし古橋が進学のために学費が必要だったとしたら、日本のスポーツ界あるいは財界あたりが放っておかないだろうということを描いて、スポーツに対する考え方が日本とアメリカとでは非常に違っており、日本の考え方は異常であるというケチをつけている有様です。もっと素直に、喜ぶべき時は喜んだらいいんじゃないですか。

次に進歩的な偏りという点もみておきたいと思います。昭和22年大晦日の社説で、吉田内閣を批判し一刻も早く退陣しろと書いておいて、その後の片山内閣には非常な声援を送っております。経済情勢が非常に苦しかったことを回顧して、「これは片山内閣の失政であり、あるいは世状を伝えるごとく社会党の無力のためであろうか。確かにそうでないという事は困難である。しかし事態の悪化が避けられない根本は戦中・戦後を通じて日本経済の弱体化があまりにひどく、遺憾ながらもはや自力では立ち上り得ない段階に達している点にある。その結果、政府が努力しても、否努力すればする程困難が増大する様な事になりかねない危険が感じられる。」これもどうかと思いますね。政府が努力すればする程困難が増大する、そんなばかな話はないと思います。この片山内閣の前の吉田内閣はもっとひどいどん底にあったわけですが、吉田さんに対しては退陣を要求し、片山さんに対しては声援を送るといった態度です。

このように、否定的な社説が30年間の大半を占めており、先程あげましたように肯定的な社説はわずかの8.5%です。30年間の社説の数は全部で70ですが、そのうち日本肯定論はじつに6点しか無いのです。そんなわけで、日本の新聞（朝日）がいかにも日本に対する否定意識に支配されているかがおわかりになるかと思います。

## ● 肯定的な社説

数少ない肯定的な社説も紹介しておかなければ不公平になると思います。

昭和31年の大晦日の社説はなかなかいい事をいっています。「明暗とりどりの変転があったわけだが、ここに1つ、静かに反省してみたいことがある。それは、ことしだけのことではなく、敗戦以来引きつづいてきている傾向かと思うが、わたしたちは、あまりにも、ものごとの暗い面ばかりをながめて、明



るい面をあえて見ようとしのではないかということである。」と書いています。昭和31年という年には、たまたま日本人が多くの業績をうちたてたという事もあって、いくつかのエピソードも紹介されています。「佐久間ダムの完成も記憶されてよいことしの大事業であった。マナスルの頂上を、日本人の足できわめたのも、不断の研究と訓練と忍耐と勇気と努力から生みだされた朗報であった。いよいよケープタウンを後にした南極観測隊の船出には、明春の明るいニュースを期待させるものがあるだろう。」佐久間ダムの建設やマナスル登頂、あるいは南極観測船の出航といった業績がでたという事なのですが、基本的には新聞社にあえて明るい面を見ようとする姿勢があれば、こういう社説はこれまでも書けたはずだと思います。それを新聞自らが反省しているわけで、これはたいへん注目すべきいい社説だと思っております。

同様にしてオリンピックの時も、日頃目の敵にしていた警察官とか機動隊、自衛隊の人たちに対して、オリンピックを首尾よく成功させるのに寄与したとって絶賛の辞を送っております。

そんなわけで基本的には日本人が大きな業績をうちたてますと、新聞もそれにつられるというふうに思いますが、もう1つはやはり新聞社の姿勢が暗い面や否定的な面ばかりをとりあげるのではなく、明るい肯定的な面もみようとすれば、いつの時代にもそういうものはみつかると思うんですね。

## 戦後のベストセラーの分析

今まで新聞の状況をお話ししましたので、次に昨年の11月号から今年の1月号の3回にわたって、雑誌「正論」に発表しました論文「戦後日本のベストセラー」の分析についてお話ししたいと思います。

まず11月号では、戦後30年間に変わらなかった面をとり上げました。それは「愛と死」というテーマにまとめられるのではないかと思います。やはり人間「死」に直面した時にどのような状況であるのか、あるいは不治の病で死んでいく恋人に対する愛情、あるいは愛する人がスパイ事件で処刑されるといった状況など、「愛と死」というテーマがからんでいるものは、いつの時代にもよく売れているようです。これはやはり人間性の本質に迫っているからだろうと思います。しかし本日は、12月号と1月号に発表しました戦後の変化の面についてお話ししたいと思います。

### ●政治的に見た戦後史

まず初めに戦後史を簡単にふり返っておく必要があります。まず政治的には、敗戦で無条件降伏し、占領されてしまったのですから国際的にはゼロという立場におとされました。それから経済的には闇市が横行し、生命をつなぐためには闇米を買わなくてはならないというどん底の生活になりました。それが戦後30年の間に着々と回復してきたといえると思います。

そこで発表した論文を少し読ませてもらいますと、「政治の側面で見れば、占領という主権喪失（国際的にゼロ）の状態が約5年間続いて、サンフランシスコ平和条約の締結によって、やっと主権を回復したのが、昭和27年（1952年）であった。平和条約については、全面講和か単独講和かの論争が国論を2分したが、曲りなりにも国の独立を確保することができたのは、単独講和とはいえ、平和条約が結ばれたからである。しかしこのサンフランシスコ平和条約に完璧を期待することはそもそも無理なことであって、さまざまな宿題が将来にもちこされることになった。その第1はソ連がサンフランシスコ講和に参加しなかったので、ソ連との間の平和条約が将来にもちこされた。第2には、サンフランシスコ平和条約の交渉段階で、中国大陸に共産主義政権が樹立されたため、中国との平和条約を台湾と結ぶべきか、中共政権と結ぶべきかの選択を迫られることになった。中共政権の成立が1949年（昭和24年）、そしてその翌年には朝鮮戦争が勃発するという事態だったことを考えれば、吉田首相が台湾を選んで、日華平和条約を結んだのも、当時としてはやむをえない選択だったと思われる。しかしその結果、新たに中国政府との平和条約の締結が宿題として残されることになった。また第3には、サンフランシスコ平和条約によって、日本本土から切り離され、信託統治地域にされた奄美、小笠原、沖縄の本土復帰が宿題として残されることになった。」その他、旧安保条約の改訂も宿題として残されたわけです。「サンフランシスコ平和条約はこのようにたくさんの課題を残していったが、その後の約30年間に、これらはほぼ全面的に解決をみたのである。日本の国際的地位は、日本の国連加盟（昭和31年）、日ソ国交回復（昭和31年）、日韓国交正常化（昭和40年）、日中国交回復（昭和47年）、日中平和条約（昭和53年）が実現されたことによって一步一步向上していった。残るは日ソ平和条約と北朝鮮との国交くらいのものである。また領土問題としては、奄美の返還（昭和28年）、小笠原の返還（昭和43年）、沖縄の返還（昭和47年）が実現して、残るはソ連との間の北方領土くらいのものである。もっとも韓国との間の竹島、中国・台湾との間での尖閣列島の問題があるが、これらは戦後処理の問題とは関係はないので、別個に解決されるべき問題である。このようにみえてくると、基本的にいって、北方領土の未解決と、その結果としての日ソ平和条約の未締結ということを残して、他はすべて解決したとっていいであろう。」

従って占領で無条件降伏という主権を喪失した状態から、30年間で北方領土とそれにかからんだ条約を除いては全部解決したとっていいと思います。これをもって、着々とよくやってきたという評価もできましょうし、遅々として歩みはのろいという批判もあろうかと思いますが、私はまあよくやったものだというふうに思っております。

## ●経済的に見た戦後史

それから経済的には、図2の「1人当りの国民所得」をみますと、日本が

いかに急成長で回復してきたかがおわかりになるとと思います。1人当り国民所得を米ドルに換算して、100ドルを越えるのが1950年。60年安保で倒れた岸首相の後に池田首相が登場しましたが、池田首相は所得倍増政策を打ちだしました。その時の計画では、10年間で所得を倍増させようと考えたわけですが、その当時そんな事は無理だという意見もだいぶだされました。ところが1960年に382ドルだったものが、1962年には500ドルを越え、508ドルになります。1人当り国民所得が500ドルを越える頃から世界的な傾向として、電気洗濯機やテレビなど耐久消費財が普及しはじめるといわれていますが、たしかにこの頃から日本でもそういうものが非常に普及していきました。ところがこの500ドルが倍増して1000ドルを越えるのはいつかと申しますと、それから6年たった1968年に実現しています。ですから池田首相が10年間とっていた事が、6年間で実現しているんですね。もちろん1人当り国民所得もインフレで貨幣価値が下

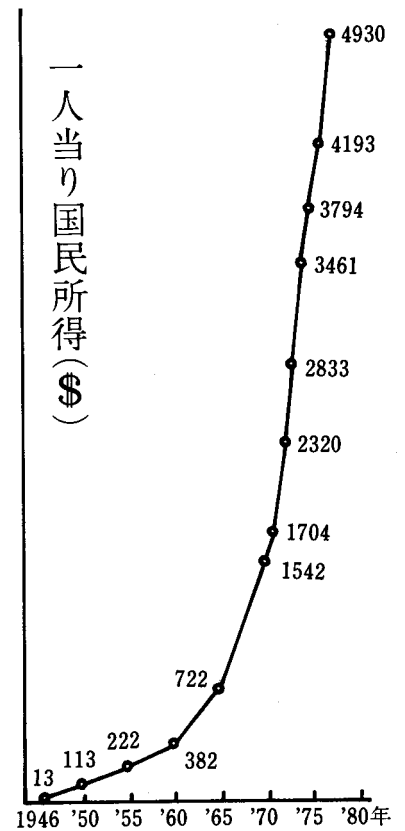


図2

ってきますので、機械的な数字だけで倍増とはいえないでしょうが、しかしなおかつ数字上では6年後には倍増しているわけです。それがおどろくべき事に、さらにどんどん倍増が進みまして、次の倍増が4年後1972年に2320ドル、それが5年後の1977年には4930ドルとまた倍増しています。ですから国際的に日本の地位というものが回復していくと同時に、経済的にはこのように急角度の成長が1960年度以降実現していったという事がいえます。

こういった事にあわせてベストセラーの本でも終戦直後の比較的日本否定論の強いものから60年代のハウ・トゥーものを経て、70年代の日本肯定論が増えてきているというふうに私はみています。

### ●終戦直後のベストセラー（日本否定論）

終戦直後のベストセラーは、西田幾太郎『善の研究』とか三木清『哲学ノート』、『人生論ノート』、天野貞祐『生きゆく道』など京都学派の哲学ものがよくでています。私はこの頃高等学校の学生だったのですが、岩波で『善の研究』が復刊された時は徹夜で行列ができる有様でした。私自身は行きませんでした。買いに行った友達などを覚えています。結局こういうものは復刊でして、三木清の『哲学ノート』も『人生論ノート』も初版は昭和16年な

のです。それが用紙事情でだせなかったのが、戦後復刻してでてきたというわけです。この辺はまさに経済的な用紙の不足という事情に対する反動として、活字であれば何でも読まれたという時代でした。

文学の方でも、『細雪』、『凱旋門』、『罪と罰』、『風と共に去りぬ』、『ジャンクリストフ』など古典的な文学が終戦直後には多くベストセラーに入っております。民衆は知的にも飢えていたのだらうと思います。

また社会的な面でのテーマで、ベストセラーになっているものとしては、尾崎秀実『愛情はふる里のごとく』がまずあげられますが、これは「愛と死」というテーマのものでもあります。ゾルゲ事件に関係して彼は確信犯であり、自らスパイという事を自認しているわけです。日本の機密をゾルゲを通してソ連共産党に流すことが、日本軍国主義を倒し、日本を救うことだと確信していたわけですが、ただ獄中において、夫人と娘さんとの間にかわされた往復書簡集というものは涙をさそい訴えるものがあつたわけです。それでこの本は「愛と死」というテーマにもなるのですが、イデオロギー的には日本軍国主義批判の強いものでした。

河上肇『自叙伝』というのも同じような傾向のものでした。

さらには現共産党委員長、宮本顕治氏の奥さんである宮本百合子さんの『風知草』なども、共産党幹部が釈放された昭和20年10月10日の代々木本部の模様などが描かれていて、日本軍国主義の犠牲者を描くことによって、日本軍国主義への批判を内容としたものです。宮本氏は網走から釈放された後も、歩き方が非常にゆっくりしているのだそうですが、そうした歩き方というのは、囚人が運動を許されて庭に出たとき、できるだけ日光をエンジョイしようと思ってわざとゆっくり歩くんだそうでして、その経験の結果として宮本氏がゆっくりと歩くようになったというような述懐をしている所があります。そういったところは非常に気の毒と言いましょうか、そういう形でのアピールがあると思います。

思想的に尾崎秀実、河本肇、宮本百合子という左翼からの日本批判、日本軍国主義批判といったものがずっと続いたわけです。さらに岩波の『日本資本主義講座』、それにそのメンバーの一部が書きました『昭和史』(遠山茂樹ほか)というようなものが、昭和28年、30年にベストセラーになっています。

『日本資本主義講座』などは私が大学を卒業して助手になった頃のものですが、社会主義勢力は絶対に侵略戦争はしないといって、25年の朝鮮戦争は明らかに南がやったものだ、という記述を読んで、そういうものかなと思った記憶があります。『日本資本主義講座』の第1巻の冒頭に「日本資本主義講座の出発のために」という編集方針が書かれておりますが、要するにアメリカ帝国主義の手先になっている日本資本主義を批判するという線です。ソ連については、ひと言も反ソ的な事は書いてありません。むしろ共産圏については、『ソビエト同盟を先頭とする全世界の平和・反ファシズム勢力の巨大な抵抗』を絶賛したり、『中国人民はソ同盟その他民主主義陣営の諸国の援助をうけて、抗米援朝の重い負担をにないながらも、国

内の経済建設に驚異的な成果をしめした。そして直接的な戦火に見舞われた朝鮮人民（北半）の場合でさえ、生産水準は頑強に維持された」などと、社会主義陣営に対しては最上級の修飾語をもって熱い感情を投射しているのです。非常にかたい本ですが、岩波という権威とそうそうたる進歩的文化人の顔ぶれで、学生の間には非常な人気がありました。

『昭和史』の方は同じような路線を戦前にまで拡大したもので、昭和の歴史を左翼の立場から書いたというものです。

それに対して竹山道雄氏が『昭和の精神史』という本で反論を書きましたが、いかんせん『昭和の精神史』よりも『昭和史』の方がよく売れたようです。

この辺は左翼陣営からの日本否定論、あるいは日本軍国主義否定論という事になりますが、当時はそれ以外にもリベラルな立場から日本否定論が出ていました。その代表が笠信太郎氏の『ものの見方について』です。これは昭和26年のベストセラー第1位です。これはヨーロッパに特派員として長く滞在していた著者が日本に帰ってきて、ヨーロッパの先進国、イギリス・ドイツ・フランスと比較して、日本人がいかになめかという事を説いている本です。

具体的に少し引用してみますと、「どこか似通っていると思われるような点を取ってみても、日本人の考え方は西欧諸国民のそれとは大分開きがあると言わざるを得ないようだ。ドイツ風に似ていると思われるのは、ただ我々が学校でドイツ風の学問をしたというところから、ドイツ的な理論尊重の考え方に強く引付けられているということに過ぎないようであり、政治の形成がフランスに似ているといっても、そこには天啓のようなひらめきをもった思想を把握して、どこまでも自己を貫徹するという様な調子などは爪の垢ほどもないといってよい。いわんや、一切の経験の集積からくる均衡のとれた知識で仕事に当ってゆくイギリス人の『常識』は、我々の誰でもが一応は持っているように見えて、実は我々に一番欠けているところであろう。」と述べています。敗戦で価値が転倒してしまっていて、どちらへいってよいかわからないという状況において、日本人に先進諸国のものの見方というものを教えていくという事はそれなりに大事だと思うのですが、ドイツ・イギリス・フランスを例にだして、日本人はある面でそれに似たようなところがあるのだけれど、すべてまやかashiもので、日本人は本ものではない、ということを取り返し説明しているわけです。

日本人は全く浮かばれない存在です。

## ● 実用的な本

次はちょうどカッパ・ブックスがベストセラーをだし始めたのとタイミンが合うわけですが、よくもこれだけでるといえるほどハウ・トウものが並びます。

坂本藤良『経営学入門』(1958年)、清水幾太郎『論文の書き方』(1959年)など、50年代の終わり頃からではじめまして、60年に入りますと『性生活の知恵』とか、『私は赤ちゃん』、『頭の良くなる本』、『英語に強くなる本』、『記憶術』というハウ・トゥものがずっと続くわけです。

これはまさに60年代の経済成長に対応して、実用的な本が求められたのだろうと思います。

## ● 日本肯定論

ところが60年代の終わり頃からこの傾向が変わっていくように思います。68年に川端康成氏がノーベル文学賞を授与されておりますが、これは非常に象徴的な出来事のように思います。それまでは湯川博士、朝永博士と自然科学、しかも理論物理学という、いってみれば紙と鉛筆さえあれば世界と勝負できるといったユニバーサルな分野で、ノーベル賞が与えられていたわけです。日本文化というおよそ外国人にはわかりにくい面で、ノーベル賞を与えられたという事は、それだけ日本文化の独自性といましようか、深みというようなものが世界的に認められたということを表わしていると思うのです。この68年の川端氏の受賞あたりから70年にかけて、日本人や日本文化に対する見直しがでてきたのではないかと思います。

川端氏の受賞記念講演は「美しい日本の私」でしたが、その冒頭で「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて 冷しかりけり」という道元の和歌と、「雲を出でて 我にともなふ 冬の月 風や身にしむ 雪や冷めたき」という明恵上人の歌を引用して、禅僧の「澄める心」を日本文化のエッセンスとして紹介したわけです。こういう心境というものは外国人にはわからないだろうと思いますが、ともかくそういうものが受賞の対象になったということは、日本文化を見直す社会的風潮のうえからみてたいへんに象徴的なことだと思います。

次に1970年のベストセラーのトップは、塩月弥栄子さんの『冠婚葬祭入門』で、これはハウ・トゥものではあります、日本の伝統的な慣習が見直されたということもできます。

それからやはり1970年に薬師寺の高田好胤管長の『心』がベストセラーになっております。これは薬師寺金堂を再建するためのキャンペーンの本だったわけです。薬師寺は豊臣秀吉の時代に火事があった、薬師三尊を安置してある金堂が焼けてしまい、それ以来仮の住いだっただけです。それを高田管長は再建しようと考え、最初アメリカのロックフェラーだったかフォードだったか、10億円かかる費用をそっくり寄附してくれるという話があったようです。しかし高田管長はあくまで昭和の日本人が自らの浄財で再建したという形をとりたく、せっかくの申し出をことわって般若心経の写経による納経料千円を集めるというキャンペーンをやったわけです。その結果、10億円以上が集まり、金堂は見事に再建されました。そのキャンペーンをやった

のが『心』という本であります、ここにも伝統的な日本文化に対する肯定的な意識の盛り上りをみることができます。

#### —日本人と外国人との比較—

次に1971年のベストセラー第1位はイザヤ・ベンダサンの『日本人とユダヤ人』ですが、これはちょうど20年前の笠信太郎氏の『ものの見方について』から20年たっているわけです。片方は1951年のベスト・ワン、片方は1971年のトップというわけです。いずれも日本人というものを外国人と比較しているという点で共通性があります。

この本でよく引用されるのは、日本人は空気と水はいつでも只で与えられると思っているというような個所です、日本人を批判している面もありますが、基本的にはユダヤ人と比べて日本人がいかにラッキーであり、恵まれた国民であるかを指摘しているのが特徴です。その1例として保険の観念が全く違うとっております。ユダヤ人というのは長らく国家もなく、ほんとうに迫害の歴史をくり返してきた民族です。だからある期間、保険というものによって危険に対して安全を保障してもらえるということになれば、金をつんででもそれだけでありがたいという考えになるわけです。ところが日本人の場合、各家庭でいろいろの保険をかけていますが、満期になれば何がしかの金が返ってくるという考え方が強いんですね。掛け捨ては損だという考え方があられるわけです。ベンダサンにいわせれば、この考えは保険ではなくて、貯金だということですね。つまり日本人というのは、本当の保険の観念をもっていない、その理由は危険というものを本当に知らないんだというわけです。それほどに日本人というのは、ユダヤ人と比べてラッキーな国民だというわけです。

それからついでに申しますと、イザヤ・ベンダサンはおそらく訳者であり出版者である山本七平氏ではないかとみられていますが、イザヤ・ベンダサンという言葉の意をご存知でしょうか。遠藤周作氏の『ぐうたら人間学』によりますと、イザヤ・ベンダサンというのは、たまりたまってもうがまんできなくなって、『さあ、便ださん』ということだそうですね。

#### —伝統的家族制度の肯定—

次に72年のトップは有吉佐和子さんの『恍惚の人』で、これは毫碌した老人の話ですが、これなどもみようによっては、核家族という現代の風潮を批判しているように思われます。ぼけてしまった舅さんを扱いかねている嫁さんの考え方の転換が主題です。舅をあずかってくれるところがないかと、嫁さんはいろいろの施設に当たってみるのですが、老人ホームと老人クラブの違いを知るわけです。老人クラブというのは昼間だけ老人をあずかって遊ばせ、夕方には家族に返すというものです。それに対して老人ホームのほうは、

老人をずっとあずかってしまうもので、一種の姥捨山です。この嫁さんがある老人クラブを訪れたところ、そこの若い女事務員が次のように語ったのをきいて、忽然と翻意するわけです。

「老人ホームに親を送りこむっていうのは気の毒ですよ。子供や孫と一緒に暮すのが誰でも一番幸福なんですもの。老人クラブに来られる年寄りが、だから私は一番幸せだと思うんですよ。ここへ来れば賑やかに遊んでいられるし、帰れば子供や孫に囲まれるわけですからね。」この言葉に嫁さんははっとしまして、これからはもう舅を老人ホームなどにやろうとは思わずに、できるだけ生かして自分が世話をしようと決心する次第です。

この事は新しい核家族制度への一つの批判であり、つまりは日本の伝統的な家族制度を肯定しているとも読めるわけです。

### —庶民の歴史の肯定—

次に田中角栄元首相の『日本列島改造論』がありますが、これはまあスキップするとして、次に1972年の第3位にでている司馬遼太郎氏の『坂の上の雲』などはたいへんに感動させられるものです。日露戦争の時に活躍した伊予・松山出身の秋山兄弟の物語です。

伊予という所は明治維新の薩長土肥からははずれておりますので、学校をでる以外に出世する道はなく、その学校も家が貧乏であれば官立の学校へいくしかないわけです。そこで兄の秋山好古は陸軍士官学校へ進み、騎兵の創設者となり、後に満洲でコサック騎兵を破ることになりました。弟の秋山真之は、正岡子規と同級で、一緒に東大の前身であります大学予備門に入りました。当時の学生はそれぞれの領域で日本一の人間になろうという青雲の志をいだいて上京していったようですが、秋山真之は文学の面では正岡子規にかなわないことを悟り、海軍兵学校に入り直します。その結果、日露戦争の日本海海戦で、東郷元師の参謀としてバルチック艦隊を撃破する功績をたてました。それらの経過が非常に感動的に描かれていますが、第一巻の終りに司馬遼太郎氏の歴史観が雄弁に語られています。

「維新後、日露戦争までという30余年は、文化史的にも精神史の上からでも、ながい日本歴史のなかでじつに特異である。これほど楽天的な時代はない。むろん、見方によってはそうではない。庶民は重税にあえぎ、国権はあくまで重く、民権はあくまで軽く、足尾の鉍毒事件があり、女工哀史があり、小作争議がありで、そのような被害意識のなかからみればこれほど暗い時代はないであろう。しかし被害意識でのみみることが庶民の歴史ではない。明治は良かったという。その時代に世を送った職人や農民や教師などの多くが、そういつていたのを、私どもは少年のころにきいている。」

前に朝日の社説で、新聞が暗い面ばかりをとりあげてことを反省したものを紹介しましたが、司馬さんの歴史観もそれと同じ立場といえましょう。明治の最初の30年間も女工哀史とか足尾の鉍毒事件とかの暗い面に着目すれば、



そういうものはもちろんある。しかしそういう暗い面や被害者意識だけを取りあげるのが、庶民の歴史だとはいえないというわけです。明治はよかったという明るい面もあるんだという歴史観から、秋山兄弟の活躍を描いているわけで、やはり日本肯定論の代表だと思います。

#### —日本に対するいとおしみ—

次に1973年のトップに小松左京氏の『日本沈没』がありますが、これは日本を沈没させてしまうわけですから、日本完全否定論ともとれるわけですが、私はこれを最大の日本肯定論だと思っております。

ある地質学者が日本列島に恋をしてしまい、その日本列島が海底のあるメカニズムによって沈んでいくわけです。ちょうど恋人が癌におかされて死んでいく、その恋人をいとおしむ気持ちと同じ気持ちを、沈没していく日本列島に対して表明しているものです。ですから、最大の日本肯定論といえるでしょう。そこにはイザヤ・ベンダサンの『日本人とユダヤ人』の影響もみることが出来ます。

「1兆ドルに近い社会資産と、それをもとにして年々世界第2位、3500億ドルのGNPを生み出し、21世紀には世界第1位になる事を約束されていた11,000万の住民—アジアにあってただ一国、いち早く近代化に成功し、大産業国家をきずき上げた『日本的』としかいいようのない特異な文化をもった国—その島国が、きずきあげた巨大な財産と変化に富んだ美しい国土もろとも、この星の深部に由来する眼に見えぬ巨大な力によってひき裂かれ、ふきとばされ、粉々ににぎりつぶされ、海底に沈もうとしているのだ」

アジアで唯一のすばらしい文明と文化をきずきあげた日本という国が沈没していくというのです。その後地質学者の田所先生の述懐が次のようになります。

「あちこち見てまわったうえで、私は日本列島と恋におちいったのです。そりゃ、自分が生まれた土地というひいき目はありましよう。しかし—気候的にも地形的にも、こんなに豊かな変化に富み、こんなにデリケートな自然をはぐくみ、その中に生きる人間が、こんなにラッキーな歴史を経てきた島、というのは世界中さがしても、ほかになかった。…日本という島に惚れることは、私にとっては最も日本らしい日本女性に惚れることと同じだったんです。」

この惚れた日本列島が沈没していくのであるから、それに対する気持ちは死んでいく恋人をいとおしむ気持ちと全く同じだと思います。

#### —外国人の日本肯定論—

次に少しとびますが、昨年1979年、ボーゲル氏の『ジャパン・アズ・ナンバーワン』とライシャワー氏の『ザ・ジャパニーズ』という本がベストセラーになったということも、日本肯定論の延長線上にあるものと思います。ウ

オーゲル氏のもは皆さんお読みだと思ひますが、1つだけ引用してみましよう。

これはオートバイの関係でもありますが、「1950年代の前半、日本のラジオ、テープレコーダー、ステレオなどはその品質において、アメリカ製品より劣っていたが、たちまち市場を支配する様になり、日本の時計産業は世界に名高いスイスの時計産業を顔色なからしめた。イギリスのオートバイ産業は日本によって駆逐されてしまったし、アメリカのオートバイ会社数社のうち非日本系のもはハーレイ・ダビッドソン社ただ1社になってしまった。第2次世界大戦以前、カメラ・レンズ業界に君臨していたドイツは、日本に王座を明け渡し、光学機器にしても、日本の製品は傑出しているといった具合である。」

この次に楽器の話も出てきますが、あらゆる面で日本の製品が世界を駆逐してしまつた例をあげています。また犯罪の発生と検挙率でも日本がすばらしい国であることをほめあげています。

これらのものがベストセラーの上位に入るといふことに、70年代の支配的な傾向がみてとれると思ひます。

## 論理の変遷

以上、日本否定論から日本肯定論への推移を概観したわけですが、最後にその論理的根拠の変遷もみておきたいと思ひます。

まず否定論の系譜からみていきますと、最初はアメリカ民主主義に立脚して、日本軍国主義を否定していきます。ところがアメリカは占領軍として日本に駐留しましたから、米軍とのトラブルがたえず、ソビエト社会主義への一種の憧憬と重なって、次にはソビエト共産主義を土台として、日本軍国主義およびアメリカ民主主義を批判するようになります。しかしそのソ連でスターリン批判がおこって、ソビエト共産主義も権威を失います。すると「ソ連はだめだが、中国はいい」といって、毛沢東思想を根拠に、ソ連、アメリカ、日本を批判するようになります。ところがその中国が文化大革命でがたがたしてくると、今度はマルクセなど第3世界に期待するという動きがでてきました。しかしその第3世界でも、ベトナムのカンボジア侵攻などがあって、共産主義も第3世界イデオロギーも色あせてしまいました。今やすべてのイデオロギーが根拠になり得なくなつたと思ひます。私はこれを称して、「猿がラッキョの皮をむいている図」というのです。革命の担い手になる中核が、なかにあるだろうと期待して、次々と皮をむいていくのですが、いつまでもたつても実はでてこず、遂に全部をむき終つてしまつたといふことです。これがまさに「イデオロギーの終焉」といふことではないかと考えています。

これと裏腹に日本肯定論の論理をたどっていきますと、まず最初は水泳の古橋選手の肉体の力であつたと思ひます。次には湯川さんのノーベル賞で、

これは理論物理学といういわば自然科学の領域からの日本人の主張でした。そのあとは60年代の新幹線の開通やオリンピックなどにみられるように、自然科学を応用したテクノロジーの世界で、日本が世界に冠たるものをうちたてたわけです。そして次に川端康成氏のノーベル文学賞受賞、続く70年代における日本の伝統文化による日本肯定論といった推移をたどってきたと思います。

ですから両者を合わせますと、「イデオロギーの終焉」と「日本の伝統文化の復活」というものが結びついて、80年代を指導していくのではないかと考えております。

どうもありがとうございました。

## 本田財団レポート

- |       |  |        |
|-------|--|--------|
| No. 1 | 「ディスカバリーズ国際シンポジウム ローマ1977」の報告<br>電気通信大学教授 合田周平     | 昭53.5  |
| No. 2 | 異文化間のコミュニケーションの問題をめぐって<br>東京大学教授 公文俊平              | 昭53.6  |
| No. 3 | 生産の時代から交流の時代へ<br>東京大学教授 木村尚三郎                      | 昭53.8  |
| No. 4 | 語り言葉としての日本語<br>劇団四季主宰 浅利慶太                         | 昭53.10 |
| No. 5 | コミュニケーション技術の未来<br>電気通信科学財団理事長 白根禮吉                 | 昭54.3  |
| No. 6 | 「ディスカバリーズ国際シンポジウム パリ1978」の報告<br>電気通信大学教授 合田周平      | 昭54.4  |
| No. 7 | 科学は進歩するのか変化するのか<br>東京大学助教授 村上陽一郎                   | 昭54.4  |
| No. 8 | ヨーロッパから見た日本<br>NHK解説委員室主幹 山室英男                     | 昭54.5  |
| No. 9 | 最近の国際政治における問題について<br>京都大学教授 高坂正堯                   | 昭54.6  |
| No.10 | 分散型システムについて<br>東京大学教授 石井威望                         | 昭54.9  |
| No.11 | 「ディスカバリーズ国際シンポジウム ストックホルム1979」の報告<br>電気通信大学教授 合田周平 | 昭54.11 |
| No.12 | 公共政策形成の問題点<br>埼玉大学教授 吉村 融                          | 昭55.1  |
| No.13 | 医学と工学の対話<br>東京大学教授 渥美和彦                            | 昭55.1  |
| No.14 | 心の問題と工学<br>東京工業大学教授 寺野寿郎                           | 昭55.2  |
| No.15 | 最近の国際情勢から<br>NHK解説委員室主幹 山室英男                       | 昭55.4  |
| No.16 | コミュニケーション技術とその技術の進歩<br>MIT教授 イシエル デ ソラ プール         | 昭55.5  |
| No.17 | 寿命<br>東京大学教授 古川俊之                                  | 昭55.5  |
| No.18 | 日本に対する肯定と否定<br>東京大学教授 辻村 明                         | 昭55.7  |